幕末経世思想に関する一考察：漢学者野田笛浦を中心として

A Research on Keisei Thought in Late-Edo Period：In the Case of Noda Tekiho

方　亮

FANG Liang

要旨　幕末の内憂外患の時代、明清時代の「経世済民」を源流として、「実用」に重きを置く経世思想は日本に伝来し、広く幕末の学者に影響を与えた。そして、漢学者を始め、多くの経世論者が現れた。この中で、漢学者野田笛浦も経世論を唱える一人であった。野田笛浦（1799—1859）は、江戸時代後期の儒学者、および漢学者である。江戸の昌平黌に学び、文政 9 年（1826）に漂着した清国商船「得泰号」を送還する任務を幕府から命じられ、その清国船に同乗して長崎まで行った。この時に清人と筆談した記録をもとに『得泰船筆語』を著し、有名になった。その後、各藩に遊学し、晩年には田辺藩に戻り、藩政改革に尽力した。これまでの研究では、日中往来について、野田の『得泰船筆語』はよく取り上げられ、また彼の『海紅園小稿』は漢詩文集の優作として紹介されたが、経世論の視点から野田の論説を考察したものは管見の限りほとんど見られない。本論では、野田笛浦の学問受容、救済救民、対外関係などにおける論策を中心として、野田の経世思想を明らかにしたい。

はじめに

本稿の背景として、まず、中国から日本へ輸入された「経世済民」の理論が、十八世紀前半から十九世紀に至る間に、めまぐるしい変化を被っていた日本の思想界の中で影響力を持っていた、ということを確認しておきたい。

十八世紀前半の享保年間より、東アジアの正統思想である朱子学に異説が唱えられるようになる。新しい儒学思想を作り出した荻生徂徠による徂徠学をめぐり、徂徠・反徂徠の論争が始まるとともに、折衷学、考証学なども次々に登場した。また、その刺激を一つの要因として、国学や蘭学も生まれた。十九世紀に至ると、外国船の到来、農村の飢饉などの内憂外患が続き、尊王攘夷思想の広がりとともに、藩政からさらに幕政までの改革を構想する学者が現れた。こうした動きの延長上に新政府樹立の構想もあったのだと考えられる。政治体制の刷新を求める志士達が抱いていた理念はそれぞれ異なるが、「経世済民（世を治め民を済う）」という志向性は共通していた。その経世思想の源といえば、明末清初の顧炎武、黄宗羲、王夫之などに代表される「経世致用の学」であるだろう。

中国史における大きな転換点であるアヘン戦争の敗北は、オランダカピタンが提出した別段風説書によって、幕府に伝えられた。また、清国の戦敗に憤慨しながらも、西洋文明を正視しなければならないと考えた魏源は、『聖武記』、『海国図志』を著し、「夷の長技を師とし以て夷を制す」と述べて、西洋技術を学ぶべきだと主張した。これらは日本に伝来し、海外情報や西洋の接近による危機も幕末社会に伝えられたのである。また、清末に江蘇布政使賀長齢が魏源に編纂させた『皇朝経世文編』も日本に輸入され、経世論者だけではなく、江戸の知識人にも珍重されるものとなった。もちろん清末の「経世済民」の理論と、同時期の日本の知識人のそれとは、共通する面もあったが相違していた面もあるだろ

う。日本で「経世」を説く学派には、幕府官学の朱子学派の流れを汲む者のみならず、陽明学、古学、さらにそれらを折衷する学派も存在した。前田勉が説くように、「江戸後期には、こうしたさまざまな思想が生まれ、それぞれがお互いを強く意識しあいながら、ある場合には対抗し、ある時には交錯し展開してゆく、一つの思想空間が成立したのである。」[1] それゆえ、思想史的に見れば、幕末において日本の「経世学」あるいは「経世思想」は単独の思想学派として現れることはほとんどないが、様々な思想学派と繋がり、それぞれの思想学説に影響を与えられながら、幕末の思想的多様性を貫通しつつ共有されていたのではないかと考えられる。清末思想、特に経世思想を研究した大谷敏夫は「総じて経世学者にとって儒学は経世に役立つ根拠となる倫理道徳を明らかにするものであり、あくまで実用を重視した」[2] と主張するが、日本の経世学または経世思想の範囲や定義はまだ十分に明確にされてはいないと思われる。本稿では、幕末の経世思想における一事例として、野田笛浦という人物の経世論を取り上げて検討したい。

齋藤拙堂[3] は幕末の代表的な経世論者としてしばしば議論の対象とされるが[4]、昌平黌の同門であった漢学者野田笛浦も同じく幕末の経世論者の一人であった。にもかかわらず、これまで野田はもっぱら『得泰船筆語』の著者として、清商船漂着事件において取り上げられてきたに過ぎず、彼の経世論者としての一面はまだ十分には検討されていない。そこで本稿は、野田の昌平黌時代の作品に着目して、彼の「経世」の思想を明るみに出していきたいと思う。野田笛浦は十三歳にて江戸に遊学し、古賀精里[5] の門に入った。その後、精里の息子侗庵が教鞭を執る昌平黌の寮で学び、寮長になった。さらに、侗庵の助教となって、教授することもあった。生活はあまり裕福ではなく、「半ば食客半ば教授」[6] の生活を送っていたという。朱子学のみを推尊する師の古賀精里と違って、野田は朱子学説を墨守したわけではなく、経学以外にも漢詩文を能くし、歴史または現実における社会問題にも着目していた。本論では、野田笛浦が残した漢詩文を取り上げ、そこからどのような「経世」の思想を読み取ることができるのかについて、考察していきたい。

一、野田笛浦について

野田笛浦は、寛政十一年（1799）六月二十一日に生まれた。丹後田辺藩（京都府舞鶴市）出身で、名は逸、字は子明、通称は希一郎。当時、野田家は田辺藩主牧野家の世臣にして、家格は高かった。前述の通り、野田笛浦は寛政三博士の一人である古賀精里に学び、齋藤拙堂、羽倉簡堂らと昌平黌の同門であった。

文政九年（1826）、清商船得泰船が駿河国の清水港に漂着した時、昌平黌寮長である二十八歳の野田は代官の羽倉簡堂[7] に選ばれ、幕府の命によって、得泰船員と筆談した。

1）前田勉『江戸後期の思想空間』ぺりかん社、2009 年、1 頁。
2）大谷敏夫「清末経世学と経世思想」アジア研究室年報 7、追手門学院大学、2004 年、30 頁。
3）齋藤拙堂（1797 ～ 1865）は、江戸後期の儒者、津藩士。昌平黌で古賀精里に学び、藩校で教鞭をとる。詩文に秀でた。実学に力を入れ、警世の書「海防策」「海外異伝」を著す。他に「拙堂文話」など。
4）前述の大谷敏夫は齋藤拙堂を江戸後期の代表的な経世論者の例として「幕末経世思想についての一考察－齋藤拙堂の思想を中心として」を著した。
5）古賀精里（1750—1817）は、江戸時代中期の儒者。朱子学に基づく学問をはかり、47 歳昌平黌の儒官となって、柴野栗山、尾藤二洲とともに寛政の三博士と言われる。
6）『先賢追慕會講話集：創立十五周年記念』京都府立舞鶴中学校、1937 年、9 頁。
7）羽倉簡堂（1790-1862））は、江戸時代後期の儒学者、代官。名は用九、字は子乾、号は簡堂・天則・可也・蓬翁・小四海堂などがあり、通称は外記。

また、得泰船船員を長崎まで護送することを担った。これを通して、野田は『得泰船筆語』を著し、「その筆談の詩文の全国に伝わるに及び、国中に初めて野田笛浦なる学者有ること知れ、その名一世に高まる」[8] と言われることになった。この「得泰船漂着事件」以降、野田は江戸のみならず、伊勢の国、松坂、また大阪にも行き、各地を周遊した。

前述のように、野田笛浦は、江戸時代の漂着船事件、または漂着民筆談の問題について検討する際にしばしば言及されてきた。特に国金海二は、「野田笛浦『得泰船筆語』について」[9] と「「野田笛浦」覚え書」[10] を発表しており、野田笛浦と漂着船との関わりを中心に分析した。しかしながら、野田笛浦の思想傾向を描出しようとする試みは乏しかったと言わざるを得ない。特に、それらに関連する漢詩文の内容はほとんど無視されているに等しい。また、はじめに述べたように、野田笛浦が世間に知られたのは「得泰船事件」への参与だけではない。野田については、『天田加佐何鹿三郡人物誌』[11] や『先賢追慕會講話集：創立十五周年記念』[12] においてその生涯が紹介されている。これらの伝記において共通するのは、野田が儒学に通じていた上に、漢詩文にも優れていたこと、また、学問としての儒学に拘泥する伝統的な儒学者ではなく、藩政の改革にも関心を持つ人物であったこと、などである。これらの記録は、地域社会に貢献した学者としての野田笛浦を賛美し、偉大な文人像を作り上げたが、顕彰のために野田の生涯を描写するものであるがゆえに、叙述の客観性や思想史的分析に欠ける部分があることは否みがたいように思われる。

もちろん、野田の漢詩文についての研究が全くないわけではない。猪口篤志は『日本漢文学史』の中で、「江戸時代の漢文学は概して言えば、儒者の文学であった」[13] と述べている。野田笛浦は儒者、知識人として、論や記など、多種の漢文学の作品を残しているが、前掲『日本漢文学史』は、野田の漢詩文を論じるのに紙幅をさいている。猪口は、「笛浦の文は概ね議論によく、記事に至るまで多く議論を挟む、「碧筠詩巻序」「林谷山人詩集序」「周急詩録引」「藤樹先生画像記」「海月楼記」「九霞楼記」「越谷桃花記」「紙鳶説」等みな佳編と称するに足りる」[14] と評価する。そのほか、知られる限りでは、野田笛浦の漢詩文作品は『今世名家文鈔』、『摂東七家詩鈔』、『嘉永二十五家絶句』等に収録されている。『今世名家文鈔』では野田を齋藤拙堂、篠崎小竹、坂井虎山と「文章四名家」、また『摂東七家詩鈔』では彼を菊池五山、安積艮斎、大槻磐渓、齋藤拙堂、梁川星巌、中島棕隠とともに「摂東七家」と称している。

それでは、野田の漢詩文の才能はどのようなものであったのだろうか。『海紅園小稿』は野田笛浦二十八歳以前の漢詩文集であり、明治十四年（1881）の版権免許によって、野田の長男の野田鷹雄が版権所有者として出版した野田笛浦の代表作である。『得泰船筆語』の中にも以下のような言及がある。

野田「『海紅園小稿』一卷、系客歳之所作，蕪雑固知、不足供大雅之台覽。然僕已辱我翁之

8）『天田加佐何鹿三郡人物誌』天田加佐何鹿三郡教育会、1927 年、59 頁。
9）国金海二「野田笛浦『得泰船筆語』について」文藝論叢（24）、1988 年、36-43 頁。
10）国金海二「「野田笛浦」覚え書」文藝論叢（25）、1988 年、10-12 頁。
11）『天田加佐何鹿三郡人物誌』天田加佐何鹿三郡教育会、1927 年。
12）『先賢追慕會講話集：創立十五周年記念』京都府立舞鶴中学校、1937 年。
13）猪口篤志『日本漢文学史』角川書店、1984 年、231-232 頁。
14）上掲、440 頁。

指摘、無隠。」

朱柳橋「尊作高妙、予謬加評序、恐有未當、尚望高明鑑之。」

野田笛浦は得泰船の護送途中に、漂着民に『海紅園小稿』を見せて、序跋を求めた。それにより、中国人の朱柳橋は序文を、また長崎在留の江芸閣も巻尾に跋文を記した。朱柳橋は「笛浦乃江戸傑出之士、工詩善文」と好意的に評した。送還事務を終えた帰途、野田は頼杏坪と菅茶山を訪ねたが、入京する時には旧知の頼山陽にも面会している。頼山陽は漂着民の中国人との文章の遣り取りについて、「古有遣唐留学生、名儒自出從此事」と賛美した。さらに、最も高い評価を加えたのは古賀精里の長男、古賀穀堂である。

子明は昌平黌において、皆の中で卓越したが、非常に傑出した才能というわけではなかった。政府に命じられ、清人と接し、往復に交渉して、はじめて才能と筆力が現れてきた。あの清人たちも優れているが、野田は独自で冷静に応接して、清人の朱柳橋と江芸閣を困惑させて、なんと愉快なのだろう[15]。

古賀穀堂は野田を才学兼備の能才であると評した。護送任務をあたかも学問の競技のように見なし、また野田が清人をやりこめたかのように古賀は誇っている。さらに、朱柳橋、頼山陽、江芸閣と篠崎小竹もそれぞれの評語または批評を書いた。古賀以外の知識人も、野田の才能には注目していたことがうかがえる。

また、前掲の『天田加佐何鹿三郡人物誌』によると、野田笛浦は書家としても名をはせていたことがわかる。「幕末の三筆」と呼ばれた市河米庵、巻菱湖、貫名海屋は、江戸の書家に晋唐書風の影響を与えた。この三人の中で、青年期の野田笛浦は市河米庵の自由奔放な作風を模倣し、中年以降は巻菱湖の温雅を手本としたと言われている。また、野田は董其昌[16]に憧れ、彼の書風を模倣していた。中年以後の作品は董其昌の書風に似ているという評価も現れる。

さらに、野田笛浦の生涯を分析すれば、詩文に堪能であるだけでなく、政治改革にも遠大な志を持っていたこともわかる。五十二歳の時、野田は田辺に帰藩し、藩政改革に着手した。最初の七年間は側用人として勤め、安政四年（1857）には執政となった。帰藩後、最も重大な事業は二つあった。一つ目は、一藩の文教を司ることであり、二つ目は、砲台築造である。彼は田辺藩に学問所を三つ創設し、舞鶴の尖端に砲台を設けた。当時、「牧さんに過ぎたるものが二つ有る。時の鼓に野田希一」[17]という話が伝わっていた。この逸話からは、藩政改革における彼の貢献と影響が非常に大きなものであったと考えられる。安政六年（1859）、野田は六十一歳で田辺藩（京都舞鶴市）にて病卒、無常院（舞鶴市大野辺）に葬られた。

「先生（野田）の時代は如何なる時であったかと云ふに、日本国民は徳川三百年の大平

15）子明之在昌平黌也、人皆以為書生之翹楚者、未甚奇之也。及其應官差接清人、才思泉涌、筆鋒精鋭、其所往復克合事宜。彼二三清人、舶來之狡狡者、而子明孤軍獨往、彼摧衂之不遑、終使柳橋避舎、芸閣束手。
　野田笛浦著、野田鷹雄編『海紅園小稿』野田氏藏版、1881 年、5-6 頁。

16）董其昌（1555-1636）は、中国明代末期に活躍した文人であり、特に書画に優れた業績を残した。清朝の康熙帝が董の書を敬慕したことは有名である。その影響で清朝において正統の書とされた。

17）『天田加佐何鹿三郡人物誌』天田加佐何鹿三郡教育会、1927 年、61 頁。

に酔ひ、鎖国安泰の夢を貪ってゐた時代の末期であって、その固い鎖国の扉もどしどしと西洋各国によって叩かれ、泰西文明の潮は寥々として我が国の海岸を洗って来た」[18] という評価は、現在の観点から見れば一面的ではあるものの、野田の生きた時代が大きな変動の時代であったことを伝えている。その時代において、庶民文化や生活に関心を持ち、現実の藩政改革につながる政策も提示しようとした野田の背景にあったのは、まずは幼い頃から勉強してきた儒学思想を開放的なかたちで捉え直そうとした見方および態度ではないだろうか。以下、儒学受容にまで遡りながら野田笛浦の経世思想の基盤を検討していこう。

二、野田笛浦の儒学受容

野田笛浦は十三歳（1812）より昌平黌にて古賀精里の門下に入って朱子学を学んでいた。「寛政異学の禁」実施の後、朱子学は幕府が統治を維持するための官学として、以前にも増して優位を占めた。師である古賀精里は、幼い頃より西依成斎に闇斎朱子学を学んで、また陽明学の影響も受けたが、尾藤二洲と頼春水との交際を通して、結局闇斎朱子学とは異なる朱子学を形成した。梅沢秀夫によると、「闇斎朱子学が『四書』『小学』『近思録』『朱子文集』『朱子語類』など朱子学を学ぶ基本となる数種の文献以外の読書を禁じ、文章よりも口頭の講義を重視して、師の説を弟子が忠実に受け継いで行くという形でその学説を承継していったことや、そのために閉鎖的、自己充足的な集団を形成していったことは周知の如くである。精里ら（精里・侗庵）は朱子学者としての自己を形成してゆく段階で、闇斎派朱子学のこのような傾向に批判的で、彼らと自己を明確に区別し、それとは異なるタイプの朱子学者たらんとしていた」[19] という。野田笛浦の藩政改革における闇斎学への反対は、師である古賀精里・侗庵からそのような昌平黌学風による朱子学を継承したことが理由であると思われる。これは第四章に詳しく論じる。

それでは、野田の朱子学の捉え方はどのようなものだったのだろうか。これを検討するためにまず着目すべきは、野田の師である古賀精里の考えである。古賀精里は清の朱子学者陸稼書[20]について、

> 『章句』、『集注』孰不讀之、用力篤志若稼書氏、能有幾人？『章句』、『集注』末疏如煙海、發明深切若稼書氏書、能有幾篇？
>
> （『章句』と『集注』は、読まない人は誰もない。陸稼書のように、力を入れ志が篤い人は誰かいるだろうか。『章句』と『集注』のように、奥深くまた深く考えさせる文章はいくつかあるだろうか。）

と評価し、また陸稼書の「尊朱辟王」を賞賛した。同様に、『得泰船筆語』の中で、野田笛浦は「康熙而還奉洛閩之説[21]者、余服陸稼書一人」といい、陸を讃称した。陸稼書

18）『先賢追慕會講話集：創立十五周年記念』京都府立舞鶴中学校、1937 年、5 頁。
19）梅沢秀夫「近世後期の朱子学と海防論－古賀精里・侗庵の場合」『幕末・維新の日本』近代日本研究会年報 3（1981）、67 頁。
20）陸隴其（1630－1692）は、清の儒者。字は稼書。純然たる朱子学者で、「居敬窮理」を根本とし、陽明学を批判したため、清初における朱子学の正統といわれた。
21）洛閩の学は、中国宋の程顥・程頤の学、および朱熹の学を総称していう。ここでは朱子学を指すと思う。

（1630-1692）は、朱子学の正統と言われ、陽明学を批判した純然たる朱子学者である。ここから、若き野田笛浦が学問の師である古賀精里と同様に、朱子学の正統的地位を認めていたことは推測できる。

さらに、精里は「讀熊沢了介[22]伝」を著し、陽明学に対する不満を表した。

談及道学者、多憑臆杜撰、牽強支離、要之不免為功利空寂之帰。

（道学（王学）に及んだものは、根拠が確かでなく、道理に合わないところが多くあるから、どうしても功利的で本性が空であるかのようになる。）

このように、古賀精里は生涯陽明学を容認することはなかったが、野田笛浦の場合、その作品「藤樹先生[23]画像記」[24]からやや異なった傾向をうかがい知ることもできる。

世に中江藤樹を温和恭敬、または孝悌尊敬、さらに近江聖人と評す。しかし、聖人呼ばれる者は、往々にして大衆におもねる人である。そのように呼ぶ人が多ければ多いほど、さらに中江先生が嫌悪される。彼の行状実記を読みながら、その容姿も偉大で優れ、他人と大いに違ったのであろうと思う。当時大洲藩主の加藤貞泰のように文才を好む諸侯も彼の才学を全面的に現させることができなかった。それは中江先生が自ら力を入れなかったからである。それで、先生の偉大独特な資質が見えるわけである。また先生の業績も覆い隠そうとしてもできなかった。今この像を見ると、確かに容姿が堂々として、威勢あり、偉大独特な偉才である。どうして衆に従う者であろうか。先生の学は、王陽明の説に基づき、また熊沢蕃山に伝えられた。王陽明は明に地方の農民反乱や匪賊を鎮圧し、一代に功業があった。熊沢蕃山は備前岡山藩主芳烈公池田光政に招かれ教化の職を務めて、藩政を振興し、通儒と称された。ただ中江先生はその政治業績が見えないようである。つまり、世は先生が王の学に学んだことを知り、王のような業績もあることはほとんど知らない。しかし、王の功業を除き、王の学に学ぶのは、王陽明の継承とは言えない。さらに、ただ王の学を熊沢蕃山に伝授するのは陽明学の伝承とは言えない。実は大洲藩に先生もその功績があったのである。小さい頃に祖父と村人が隣村から逃げてきた賊を捕える時、先生は渡船の要路を扼して賊を捉えたことがある。王陽明の擒賊より小さい功業だが、先生は治績を上げるという種を熊沢蕃山に伝えたから、熊沢はその実業を得たわけである。それで、王子の業は先生の業にある源であり、熊沢の業はまたその継続性を証明したのである。つまり、先生の業はそれを通して証明できる。したがって、その堂々して威勢のある容姿は先生の偉大独特である資質の証ではないだろう

22）熊沢蕃山（1619 ～ 1691）は、江戸前期の陽明学者。京都の人。字は了介。中江藤樹に学び，岡山藩主池田光政に招かれ治績をあげた。「大学或問」などで政治を批判し，幕府に咎められて禁錮中に病死。著は他に「集義和書」「集義外書」など。

23）中江藤樹（1608－1648）は、江戸前期の儒学者。日本陽明学の祖。初め朱子学を修め、のち、陽明学を首唱して近江聖人とよばれた。

24）月性編『今世名家文鈔（巻七）』竜章堂、1855 年、24 － 26 頁。

か[25]。

野田は日本陽明学の祖の中江藤樹を「狀貌魁梧、崖然可畏、恢奇絶特」と評価し、また彼の功業を肯定したのである。一般的に、儒学者を評価するのは、学説の承継または派閥の抗争のような視点から行われるが、野田は陽明学の学としての承継ではなく、王陽明における反乱平定への貢献、及び熊沢蕃山における政治統治への貢献などに一致した功績を見出した。つまり、野田笛浦は古賀家から昌平学派の朱子学を受け継いたが、すでに学説の対抗に執着する純粋な朱子学流儒者ではなく、また陽明学に反感を深く持つ彼の師の古賀精里とも異なり、陽明学のような「異学」にも開放的な態度を示した。

野田笛浦は儒学または朱子学の理論自体をほとんど論じない、他の学説にもことさらに異見を提起することなく、柔軟で自由な思考空間を作ったように見える。というのも、野田において有用な思想とは、反乱を平定し安定した統治を実現できる思想に他ならず、そのような特性こそ「経世思想」の根幹であったからではないだろうか。

三、齋藤拙堂の経世論との比較

前述のように、野田笛浦と同門である齋藤拙堂（1797–1865）は津藩に仕えて、経世論にも関心が深かった。救荒問題、海防策、洋学など多くの分野を通して経世思想の特徴が明らかに見えるわけである。本章では、齋藤拙堂との関係及び比較から、野田笛浦の経世論を考察していきたい。

「経世」とは、学問を用い、現実の社会問題を解決するという学説である。それによると、まず空論を捨てて、現実に着眼するわけである。「登嶽紀行序」によれば、

> 嶽之高也、寸土之積也。……嶽雖高、地天通未絶、非若天之不可階而外也。自今日而積一歩、則不出十日、而可以登彼巓矣。

とあり、土の積み重ねから山岳が高くなることと同様、一歩ずつ積み重ねれば高岳に登るのは可能である、という常識を野田笛浦は強調した。この修辞は平凡ではあるものの、抽象的な空論に頼ることなく、現実に寄り添いながら着実に実践を行うべきであるとする野田の発想に裏打ちされているように思われる。

また、江戸後期には、儒学、とりわけ朱子学の抽象的理論に耽溺することを排斥し、民生・教育のような社会政策面に着目する「経世」の発想が広く行き渡るようになる。野田

---

25)「藤樹先生画像記」世之称先生者、或称其溫謹慈祥、或称其恂恂孝悌、至称為近江聖人。然其所謂聖人者、特鄉願之流耳。称之者愈侈、而其視先生愈陋矣。余嘗讀先生之行實、想見其風采、必也恢奇絶特、有出於尋常尺度之外者焉。是以雖以當時好文諸侯、如大洲加藤公、亦不能使展其全才也。公之不用也。適足以見先生恢奇絶特有為之資也。然而先生之業、自有不可掩者矣。今観此像、狀貌魁梧、崖然可畏、果恢奇絶特、有為之偉器也。豈世之所謂鄉愿之流哉？先生之学、出於王子、而傳之於熊澤氏。王子當朱明之代、擒叛賊攘群孽、其功雷霆於一代。熊澤氏翊贊備前芳烈公、端風化、厚国脈、号称通儒。而独先生則不見功業顯然之跡焉。故世知其有王子之学、而不知有得王子之業。知其有傳王子之学、而無得王子之業、則何為学王子？使先生有傳熊澤氏之学、而無傳熊澤氏之業、則何為傳熊澤氏？蓋先生之在大洲也。少時祖父擒盗、又有賊自臨邑逃來者、邑人追捕。先生令扼渡船要路、果得賊於船中。是王子擒賊之小者、亦其所以極力下種、而使熊澤氏牧其實也。故王子之業、則可證先生之業於前矣。熊澤之業、則可證先生之業於後矣。先生之業果可證耶！乃肖像之魁梧崖然可畏者、可以證其恢奇絶特之資。月性編『今世名家文鈔（巻七）』竜章堂、1855 年、25–26 頁。

は「萬餘卷樓記」の中で、学問習得の目的について次のように説いている。

書は、天下の至宝である。蔵書しても読まず、また読んでもそこで得た知識を人に施さないのであれば、深山に本を隠すようなものであり、本も古紙や紙くずと同じではないか。……したがって、蔵書においては数量よりも、その知識がどのように使われるかということが肝心なところである[26]。

書籍を読みながら、そこから得た知識を実際の問題に応用しなければ、蔵書は無駄である。つまり、野田は経学解釈の代わりに、学知の実社会への運用を薦めていた。野田は「登嶽紀行序」と「萬餘卷樓記」を通して、「経世思想」の「学以致用」[27]を表現したのである。

齋藤拙堂は、野田に「送野田子明序」を贈り、同様の考えを示している。

書は死物であり、事は活物であり、当然一致しないものである。故に学はただ古を考察するだけではなく、今の世を知らなくてはいけない。……人情を察し物事を明らかにして、今の世において適切な策を選び、斟酌して実行することができれば、善学であると言えるわけである[28]。

学問は社会の現実を出発点として学ぶべき、また現実の物事を通して発揮されるべきものである、という思想を提示した齋藤拙堂は、「学以致用」ということについて、野田と発想を共有していたと考えられる。齋藤拙堂は幕末の経世思想家を代表する存在であり、野田笛浦との交際関係も維持していたことがその証拠である[29]。

野田と齋藤との共通点はそれだけではない。江戸末期にはたびたび地方から飢饉が発生していた。野田笛浦は「周急詩録引」において、その問題に言及した。

大洲藩の南に八九十戸がある。土地がやせて民も貧しかった。ただもろこしを食い生きているが、一人も米を食べる人がいなかった。これは最も貧乏なところである。夏の五月に、藩主が巡視して、自ら民の疾苦を尋ねた。そして、藩の糧食を配り、五年の租を免除することとなった。藩主に七言古詩が百八十あり、その実情を記した。藩にある官僚及び僧侶も従ってこれを唱えた。編集して『周急詩録』と呼ばれる。藩臣梅林典科は詩録を私、野田に見せたが、私は四作を読んで感嘆した。これは満腔の哀れみから成り立った詩句であり、実に民における天のように感じられる。凍ると衣を着せるが如き詩であり、飢えると食わせるが如き詩であり、倒れると起こすが如き詩であり、困ずると助けるが如き詩であり、さらに溝か

26）書、天下之至寶也。雖然藏而不知讀、讀而不知施之於人、則藏之於邱山、與故紙敗牘何擇？……故其藏之不在多、唯顧其用如何耳。
月性編『今世名家文鈔（巻七）』竜章堂、1855 年、34 頁。
27）学んで実際に役立てることを指す。清の経世思想家顧炎武・黄宗羲・王夫之といった人物が代表であり、主張した学術思潮である。
28）夫書死物也、事活物也。固有不相合者焉。故学非獨稽古、亦不當不知今也。……察人情、審事體、擇其宜於今者、斟酌行之、是之謂善学耳。
齋藤拙堂著、齋藤次郎編『拙堂文集（巻之三）』、46-48 頁、1881 年。
29）これは今後の課題となるが、二人の交友関係を通して、幕末儒者たちの共通する思潮について明らかにできるだろう。

ら抜けださせて寝床に休ませるが如き詩である。民を視ること傷の如くに慈しみ、父母が子を養うように民に臨むのでなかったら、この詩が成ることはなかっただろう[30]。

野田は飢饉に苦しむ貧民に救済を施すことは為政者のなすべきことであると考え、救荒問題に強い関心を持っていた。この点については、経世学者の齋藤拙堂も同様であり、「救荒事宜」及び「三倉私議」を著している。大谷敏夫の要約に拠るならば、「拙堂はその対策として為政者のなすべきこととして、（一）米穀を融通する。（二）富人に施行米を進める。（三）流民に仕事を与える。（四）病人を介抱する。（五）粥を食わせる。（草木を食とする等々をあげている）」[31]を挙げていたという。齋藤は野田より詳しく具体的な救荒策を提案していたが、為政者の持つべき責任を強調し、また貧民を救うという態度においては、野田も齋藤と基本的に一致していた。

両者の一致点をさらに詳しく見ていこう。野田は飢饉による民間暴乱を防ぐために「猫説」を書き、政府の官民関係の政策に対して、調整を求めていた。

鼠を捕えるのは猫が生れながら身につけたものである。つまり、猫は生まれながらに鼠を捕えるものである。また、猫を恐れるのも鼠が生れながら身につけるものである。つまり、鼠は生まれ落ちれば猫を怖がる。猫が鼠を捕えるのは鼠が猫を怖がることと同じ生来のものであり、それは称えるほどのことではない。猫がより貴重である原因は、鼠と抗争しないで鼠を治めることである。……今の県令官長は、自ら傲慢で権威を弄び、旧来のままの方法で天下を治める。民はただそれを責めて、怖がることには至らない。そして、官僚が民に目を側めて見られるようとなった。窮鼠が猫を咬むように、どうして限界に達すれば民は官に反抗しないことがあろうか。猫の心を持ち（暴力ではなく威令によって統治する者こそ）官僚にふさわしい[32]。

野田笛浦は、庶民、とりわけ貧民に対する強圧的な政策の効なきを論じ、貧民の反抗と反乱を惹起する可能性を危惧していた。一方では、飢饉のような社会問題の看過に警鐘を鳴らし、基本的に「民を慈しむ」という為政理念を示唆した。適度に鼠を制圧すると同時に、鼠の抵抗を防ぐ猫のように、一貫した威圧とともに適切な綏撫政策を施せば、権威を守りつつ民心も得られると考えた。つまり、柔軟で現実的な牧民策を提示していた。

そして、野田は「権相」を「紙鳶」と比喩したことを通して、「人」の重要性を強調した。

30）邑於大洲南鄙者、八九十戸。地瘠民窮、採蜀黍野蒜纔過活、絶無一人之粒食者。蓋亦荒僻之最甚者也。今夏五月、藩侯之巡封也、駐朱轓、親聞其疾苦。發廩粟救頭然之急、繼免五年之租。侯有七古百八十言紀其實。藩宰郡官諸有司、及方外之徒、亦從而和之、其詩若干首。命曰周急詩錄。其臣梅林典科、携來示逸（野田）、逸捧讀四作而歎曰、是滿腔之惻怛融而成章句者、洵乎其有天於民也。凍而衣之者、此詩也。餒而食之者，此詩也。蹶而起之者、此詩也。懸而解之者、此詩也。拔之於溝壑而上之於衽席者、此詩也。自非視民如傷、父臨而母鞠之、豈能有此詩哉！

月性編『今世名家文鈔（巻七）』竜章堂、1855 年、24 頁。

31）大谷敏夫「幕末経世思想についての一考察－齋藤拙堂の思想を中心として」鹿大史学（52）、2 頁、2005 年。

32）貓之捕鼠也、與生俱來者。生而墮地、則有捕鼠之能。鼠之畏貓也、亦與生俱來者。生而墮地、則知畏貓。貓之捕鼠、與鼠之畏貓一焉耳。是故貓之捕鼠也、無足稱者。其所以貴乎貓者、在不與鼠相抗也。……今夫人為一縣之令、一官之長、則自高大、假威弄權、操天下如束濕薪。唯其訶責之不至是懼。於是乎為天下者睊睊相讒、側目而疾視之。嗚呼！鼠窮則咬貓、今民窮矣、烏知其不反噬令長也。必也能以貓之心為心者、可以為令為長也。

野田笛浦著、野田鷹雄編『海紅園小稿』野田氏藏版、1881 年、18 － 19 頁。

　凧は自ら飛べず、風を得て飛ぶ。体は自ら跳ね上げないが、人の操作により跳ね上がる。つまり、凧は上がるも下がるも安きも危うきも風と人に依存するものではないだろうか。また、凧は権臣と似るものである。高い官職まで進む権臣は、青空に居るように高い地位を占め、威を張るが、これは順風に乗る凧のような者である。追い落とされ、獄に入れられる者は逆風に遭う凧と同じなのである。なんと終始に危険な境地に陥り、さらにそんな状況に至るだろう。凧が依る風を抑えるのも人である。それで、人により失わないということはない[33]。

「権相」の権力と立場を保証しているのは、確固たる制度ではなく、周辺に存在する「人」であり、とりわけ「糸」を握っている統治者である。統治者から任命されている為政者の地位は、実はたまたま吹いている順風に乗っているだけで、不安定で危ういものに過ぎない。このような野田の言説の背後にあるのは、政治の根幹はすべて統治者、つまり「人」次第であるという認識ではないだろうか。それは、「人」こそが基本であり、行政の成否はすべて「人」、特に統治者の賢さ次第であるという考えである。これは荀子[34]の「乱君ありて乱國なく、治人ありて治法なし（国を乱す君主はいても乱れる国はない。よく治める人はいても、その法があればよく治まるほどという法はない）」という「人治」思想の基本理念と一致する。つまり、「人を得る」のは国がすべき第一のことである。また、「人を得る」ために、常に統治者が徳政を施して民を教化することを要求される。

常に変転してやまない世界の中で、良き為政を導くのは固定的な法ではなく、その場その場の現実に柔軟に対応できる「人」なのだ、という発想は、むしろ当時の「経世思想」家においては珍しくはなかった。たとえば、齋藤拙堂は、救荒方策を提起した「三倉私議」において、

　これぞ義倉社倉は民を救う良法なれど、かかる計吏とて是を用ひば、民を傷う大害ともなるべし。是ぞ荀卿がいへる治人有りて治法無し。

と述べており、荀子の言葉に全面的な信を置いている。救荒を実施する際にも、固定的な法を定めておくよりも、これを実施するために「人」を得ることが重要であると認識されていた。法治よりも人治、さらにそれにつながる徳治を提唱することにおいて、野田笛浦は齋藤拙堂と一致していたように見える。野田のために序文を寄せた齋藤拙堂の政治観は、中国の「経世思想」が内包していた徳治観に深く影響を受けていたと考えられる。

野田笛浦自身は、具体的な「経世論」、あるいは「経世思想」を理論的に表明する論を残していないが、詩文に鋳込まれている表現、あるいはまた、経世学者としての齋藤拙堂との交際記録及び齋藤の経世論との相似に照らすならば、やはり基本的な「経世思想」の特徴を見出すことができよう。学問を現実に応用すべきであると考える「実践」の学、「学以致用」の主張、また、救荒救民及び柔軟な官民関係を為政者に提唱し、さらに「人治」

33）今夫紙鳶身不能自飛、待風以飛。身不能自騰、依人以騰。一上一下、一安一危。莫非待風依人也。甚矣。其與權相相肖也。夫權相之登顯職。致身於青雲、高牙大纛、叱吒風生者、是順風之紙鳶也。一旦鼎折覆餗、刑剧繼之者、是逆風之紙鳶也。何其終始懸絶、一至於斯乎。抑彼之所依者、皆人也。亦不得不因人失也。
月性編『今世名家文鈔（巻八）』竜章堂、1855 年、16 頁。
34）中国戦国時代末の儒家。趙の人。名は況。尊称は荀（孫）卿。著書は『荀子』三十二編。性悪説を唱え、荀子の思想の中心は、努力の積重ねによって、人間は善にも悪にもなるというものである。

の重要性を説くことは、野田が他の「経世思想」家と同様に持っていた理念である。そして、野田笛浦の藩政改革は、彼の経世の理念を藩政の中で実践する試みであったのである。

四、田辺藩における経世実践

野田笛浦は得泰船に関わる任務を終えた後、江戸昌平黌を中心に、各藩を遊学した。また、大坂で塾を開き、懐徳堂で講学し、主に江戸浅草蔵前に隠居して、江戸文人との交際を続けていた。後に、浪人志士が公然と幕府に挑戦し、海外列強からの圧力も迫りつつある幕末の混迷期に至ると、田辺藩は有能な人材を集め、藩政改革に着手しようとした。弘化三年（1846）に、帰藩令が届いたが、野田は江戸大坂の自由な環境に慣れ、藩政に拘束されることを厭って断った。しかし、田辺藩に帰藩しないと脱藩者として処罰すると迫られたこと、さらには、藩侯の牧野節成の懇望を受けたことに依り、嘉永三年（1850）江戸を離れ田辺に帰藩した。その時、野田笛浦は五十二歳であった。最初の七年間は側用人として勤めていたが、次第に藩主の腹心として篤い信頼を得ていった。安政四年（1857)、遂に九代藩主の牧野誠成に抜擢され、七家老の一人として、執政となるに至った。

野田笛浦が最初に行った改革は「学制ヲ革シテ文教ヲ興シ」[35]ことであり、つまり教育体制の革新である。それより以前の享保年間、藩主牧野英成は、河村久八と杉本剛斎の二人を抜擢し、文教を掌らせ、藩内子弟の教育を振興して田辺藩文教の基礎を築いた。田辺藩では朱子学を重視し、小学、近思録などの課程を中心として、朱子学を推尊する教育を展開させていた。天明年間、藩主宣成は初めて田辺城三の郭内に藩校明倫斎を設立し、御牧忠蔵を儒官として、明倫斎において教授させた。そして、岡田貞治及び御牧忠蔵の子の御牧柔次郎、また後には速水貞亮を招聘して、忠蔵の後を継いで明倫斎に講学させた。彼らは闇斎学派に属しており、結果、田辺藩の学風には闇斎学派の朱子学が導入される。

次いで嘉永三年（1850)、野田笛浦は学校奉行、明倫斎学職に任じられ、学校と職員の拡充、教育の振興に着手する。安政五年（1858)、三つの学問所が創設された。天明年間に築いた狭小の校舎、明倫斎は小学校に相当する明倫館と改称され、また中学校の勧善寮及び大学としての蔵修閣が成立した。その三寮の位置であるが、明倫館が中央に南向き、勧善寮が前右側、蔵修閣が左側にあった。野田笛浦は自ら学問所奉行として三校の運営を点検していた。藩士子弟は八歳より元服まで必ず入学させ、成年した後は志願者のうち、優等生を選んで学寮に入らせた。また、修学を志す子弟に藩費を支給して、他国に遊学させたのである。藩校では、漢学から主に小学内外篇、家礼、四書と五経を素読させていたが、安政年間より洋学を加え、医学、算法、習礼、習字などを拡充した。また、弓馬、槍砲術、柔術、遊泳の稽古にも広く及んだのである。

野田笛浦は、前述のように闇斎学と異なる朱子学を唱える古賀精里、侗庵の門下で学んだこともあり、天明年間より田辺藩の主流であった闇斎学派との間に距離を置き始める。しかし、家老筆頭の牛窪松軒は闇斎学派の支持者であり、田辺藩では野田笛浦のような学派にとらわれぬ態度は受け容れられなかったようである。特定の学派にとらわれることなく治国平天下の志向を持っていた野田笛浦は、朱子学の学風とは合わなかった。笠井助治[36]によると、野田は没するまで学問所において蘊蓄を傾けて講学したことはなかったの

35）国金海二「「野田笛浦」覚え書」文藝論叢（25)、1989 年、10 頁。
36）笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』吉川弘文館、1982 年、840－842 頁。

だが、ここには闇斎学派への違和感があったのだろう。その意味で、野田は以後の田辺藩における純粋闇斎学派と昌平学派抗争の種を播いたとも言える。野田の没後、闇斎派の三上是庵が招かれて儒員となったが、笛浦の一派はこれを斥けたため両派の反目は激化し、是庵は罷免となった。野田は田辺藩において直接講学したことはなかったが、その影響は深く、その学風は遂に藩学の中心の一つとなったのである。つまり、経学の他に史学を研究し、詩文を創作し、特に民間俗衆と交渉しつつ政治実践を行うことこそ、野田笛浦が帰藩十年間に力を注いでいた事業であり、彼が田辺藩に残した学風でもあった。

野田が取り組んだ藩政は、教育だけではなく、防衛にも及ぶ。一八世紀末から一九世紀初にかけて、ロシア、イギリスなどの欧米列強の商船だけではなく、軍艦も日本沿海に出没するようになる。それに伴い、海防論についてさまざまな議論が行われるようになる。一八世紀後半、ロシアの接近に対する蝦夷の処理を発端として海防の議論が起こる。ロシアによる侵略を防ぐために、林子平は『海国兵談』を著し、激しく防衛の政策を訴えた。これに対して、消極政策を提唱する松平定信のような派閥もあったが、一九世紀以降、外国船の来航頻度が高まったことによって、蝦夷のような局地的問題だけではなく、国を挙げての海防論が議論されるようになった。

野田の砲台計画はこうした幕末海防論の勃興に基づいて立案された。砲台は現在の京都舞鶴市の海舞鶴停車場に設けられ、二種類があった。大型は三門、長さは一丈五尺であり、小型は八門、長さは八尺四寸である。野田笛浦は一藩の総力を挙げて事業に取り組み、藩からは技術的、経営的協力が供与された。大砲は「震為雷」、小砲は「敵愾」と命名されたという。しかし、「この大砲で対岸の四所村宇喜多の沿岸を目がけて始終発射演習をするのに容易に弾が先まで届かなかったということである」[37] とも伝えられており、現実に外国軍艦に抵抗できる能力があったのかどうかは疑わしい。とは言え、砲台築造に基づく海防政策は江戸末期の海防論と呼応するものであると思われるし、野田笛浦は時代の動向を的確に把握して決断していたと思われる。舞鶴砲台建設の時期は、「日米和親条約」、「日露和親条約」がすでに締結された「開国」の時期に当たる。海防強化を主張する野田笛浦は、やはり藩政統治を維持しようとしていた。儒教思想に深く影響された野田は、確かに幕末時代に外来勢力の進出を望んでいなかった。

野田笛浦の晩年の活動は、教育改革に関しては、幕末期における各地の藩政状況を反映するものであるように思われる。幕府は朱子学を正学とし、さらに官立の昌平黌を設けたが、一八世紀後半以降、多くの藩でも藩士の教育のために藩学及び藩校が設立されるようになった。田辺の藩学のように、諸藩の学は朱子学を主とする儒学の講義や武術また習字などを授けるものがほとんどであったが、次第に洋学と国学を加え、年齢と学力に応じた学級制も行われるようになった。また、幕末期は列強の接近とともに海防論がさかんに唱えられた時代であったが、その一方で、洋学者からは鎖国政策及び儒教中心の思想に対する批判も生まれるようになり、社会では次第に尊皇攘夷論及び倒幕運動が高まりを見せることになる。

37)『先賢追慕會講話集：創立十五周年記念』京都府立舞鶴中学校、2010 年、17 頁。

おわりに

江戸後期は、言うまでもなく日本が巨大な歴史的衝撃を迎えた時代である。その時代において野田笛浦は、はじめは江戸昌平黌に朱子学を学んだ儒学者でありながら、同時代の多くの儒者たちと同様、彼の思想は朱子学の抽象的思弁の内側だけに止まることなく、現実社会に対する能動的な関与へと向かった。すなわち、彼の論記からは、同時代的な傾向でもあった「経世思想」の特徴が見えるわけである。晩年に田辺に帰藩し、藩政改革、特に教育に力を注ぎ、海防論を支持した背景にはこのような経世の発想があったと見るべきである。

逆説的な表現になるが、中国明清時代の経世思想が幕末の日本に定着していく過程は、同時代における中華の相対化と軌を一にしているのかもしれない。現実社会において有用で実効性のある政策を行うためには、古典籍に描かれる古代中国の理想政治をいったん相対化する必要があるだろう。野田とも親交を結んでいた齋藤拙堂の言葉を想起しよう。「書は死物であり、事は活物であり、当然一致しないものである。故に学はただ古を考察するだけではなく、今の世を知らなくてはいけない。……人情を察し物事を明らかにして、今の世において適切な策を選び、斟酌して実行することができれば、善学であると言えるわけである」[38]。学問は古の理想世界の考察だけに止まってはならない。今の世を知り、今の世に適切な策を選んで施さねば、優れた学知とは言えないのである。現実の社会問題に対して有用であるか否かを学知の価値を計る基準とするならば、朱子学派であろうが陽明学派であろうが学派の相違は本質的な問題にはならないであろう。そればかりか有用であるならば洋学さえ取り入れてもかまわないはずである。たとえば野田が海防のためには洋学に学んだ砲台を築き、齋藤拙堂が津藩においてやはり洋学に基づく種痘を施したことなどは、いずれも彼らが経世への志向性を持った儒学者であったことに由来する。

儒学者としての野田笛浦は、たとえば林羅山のように高い名声を称えられていたわけではなく、頼山陽のように強い個性によって世に知られたわけでもなかったが、野田の生涯を概観すると、江戸後期の儒者、あるいはその時代の知識人としてのある特徴が見えてくる。つまり、学問の対立及び伝統的な中国対照を放棄し、幕末の現実を根拠として「実用」を推尊すべきである。もちろん野田の同時代においても、あくまでも朱子学または陽明学を行うべきであり、西洋の学問を夷狄のものとして排斥しようとする漢学者も存在したが、国を開き貿易を進め、西洋科学を取り入れるべきであると唱える人々もいた。一方ではまた、野田笛浦のように、鎖国主義に表だって反対を唱えることはしなかったものの、改革を唱える学者も存在した。総体として見れば、野田笛浦はこの時代に登場する「経世思想」論者の一類に属する。前述のように「経世思想」は現実に基づく理念であり、それゆえに中華文化の吸収及び改革の施行においても、野田は幕末の日本における現実の主体性と優先を強調したわけである。

38）上掲の注 28。